

福岡医学雑誌 (Fukuoka Acta Medica) 百巻を迎えて

續, 輝久
福岡医学雑誌編集主任幹事

桑野, 信彦
九州大学名誉教授

原田, 実根
国立病院機構大牟田病院 | 九州大学名誉教授

金出, 英夫
国際医療福祉大学大学院教授 | 九州大学名誉教授

<https://doi.org/10.15017/13542>

出版情報：福岡醫學雑誌. 100 (1), pp.32-41, 2009-01-25. 福岡医学会
バージョン：
権利関係：



福岡医学雑誌発刊 100 周年に寄せて

九州大学名誉教授
国立病院機構大牟田病院

原 田 実 根

福岡医学雑誌は、その前身である「福岡医科大学雑誌」が明治 40 年（1907）6 月に創刊されて以来、この度 100 巻目が発刊されるという、まことに喜ばしい快挙であり、平成 15 年（2003）に創立 100 周年を迎えた九州大学医学部にとっては「むべなるかな」と思われる出来事であると感慨深いものがあります。100 年余の長きにわたって本誌の編集、発刊にご尽力下さった多くの先人そして現役の方々の情熱や努力に心より感謝し、深く敬意を表したいと思います。

九州大学医学部のホームページや九州大学医学部百年史（2004）に今日までの福岡医学雑誌の歩みが紹介されています。編集責任者であった久保猪之吉博士（九大にわが国初の耳鼻咽喉科教室を開設）の創刊の辞は、「研究および実践成績を報告し、各専門家の内外における新潮を総合報道し、（中略）名は学友会の雑誌なりといえども実は一種の大学紀要なり」となかなか意欲的でありました。内容的には解剖、生理、病理、内科、精神科などの 10 学問分野の原著、臨床講義、抄録、雑纂などの研究発表に加え、学内行事や学友会活動にいたるまで掲載されています。その後大正 9 年（1920）の第 13 巻からは純粋に医学専門の学術誌となり、さらに昭和 15 年（1940）発行の第 33 巻からは、医学部が中心になって発足した福岡医学会の機関誌として「福岡医学雑誌」に名称も変更されました。それまで発表された論文には世界的に高い評価を得た研究も少なくなく、たとえばワイル氏病の病原体を世界で初めて発見した稲田龍吉博士（内科学第一講座初代教授）の第一報「ワイル氏病病原体スピロヘータ（一新種）確定に関する予報」は福岡医学大学雑誌第 8 巻 4 号（大正 4 年 4 月）に掲載されており、さらに同巻 5 号（同年 6 月）には原著「日本黄疸出血性スピロヘータ病（ワイル氏病）の研究概要」が掲載されました。博士がこの研究で学士院賞を受賞されたことはよく知られています。

福岡医科大学雑誌の年間頁数は、大正 11 年（1922）は 1,000 頁余りでありましたが、昭和 3 年（1928）には 2,000 頁を突破し、昭和 9 年（1934）には 3,000 頁を超えるほどに増えました。しかし、太平洋戦争のため昭和 19 年 8 月に発刊は中断され、昭和 22 年 4 月復刊されました。その後、九大医学部の拡充とともに発表論文は増加の一途をたどり、昭和 33 年（1958）の第 49 巻は年間 3,555 頁、昭和 40 年の第 50 巻は年間 5,399 頁とピークに達しました。これはひとえに各教室から積極的に投稿された学位論文（和文）の急増によるものでありました。しかし、昭和 50 年代に入り投稿される論文が急激に減少し始め、一時（2000 年）は年間約 300 頁まで落ち込み、編集部必死の努力によってその後かなり回復傾向を示しているものの、年間 500 頁を超えることはないようです。

投稿論文減少の原因としては、当初は論文の二重投稿が問題とされました。当時福岡医学雑誌に投稿されていた学位論文（単独著者の和文）は、既に英文論文（共著論文）としてしかるべき専門学術誌（多くは外国雑誌）に投稿、場合によっては受理されたものを、改めて学位請求論文として書き直したものがほとんどでありました。和文論文とはいえ、図表など英文論文と同じものが用いられており、double publication の誇りは免れず、国際的にも問題とされました。したがって、二重投稿を避けるべきであるという考え方が次第に定着し、学位論文の投稿が急激に減少しました。さらに、この二重投稿の問題と関連して教授会では学位規定が議論され、「査読制度の確立している欧文雑誌に採択・掲載された論文であれば、共

著論文でも筆頭著者であれば可とする。さらに該当論文全体を和文にするのではなく、学位申請者が直接関与した部分を中心に和文にして提出する」というように申請要件が緩和されたため、従来の和文単著の学位論文の投稿はほとんど皆無といってよい状態となりました。また、最近では研究成果を国内だけでなく国外に、しかもいち早く発表する為に、国際学会で発表し、評価の高い国際学術雑誌に論文を発表することが医学研究者の常識となりつつあり、したがって和文原著論文を投稿する機会は極端に減少しています。その結果、福岡医学雑誌への投稿論文の増加は期待できず、発行も危ぶまれる状態に陥ったこともありました。

このような状況の中で、「福岡医学雑誌は既にその役割を終えた」とする廃刊に関する議論がたびたびくり返され、教授会でも議題としてしばしば取り上げられました。そして、その都度、「長い歴史を持つ雑誌で、失くしてしまうのは惜しい」というのが福岡医学会あるいは教授会の多数意見となり、廃刊されることなく今日に至っています。もちろん編集委員会でも議論が重ねられ、平成9年(1997)には医学部教授会の意向を確かめるためにアンケート調査が行われ、その結果発刊続行の賛成意見が7割近くを占めました。そこで編集委員会では雑誌の活性化を図るため、以下の編集方針を掲げて鋭意努力がなされています(九大医学部百年史, pp166-167, 2004)。

- (1) 若手研究者の育成に重点を置く。そのためには、若手研究者から少しでも多く優れた論文を投稿して貰い、研究を奨励し、広く共同研究の場をつくる。また、一刻も早く発表する価値がある論文を Rapid communication として発表する機会を与える。若手臨床医に対して症例報告をできるだけ多く発表する機会を与える。
- (2) さまざまな領域の専門家(若手研究者を含む)による総説や解説を通して、最高かつ最新の研究の国際動向を把握する。
- (3) この雑誌を九州大学大学院医学研究科や歯学部の研究、業績を紹介する宣伝のための機関誌とする。また、できるだけ多くの先生に相談し、立派な論文発表を推薦していただき、それらを解説という形でお願いする。

この編集方針は一般論として間違いないと思われますが、福岡医学雑誌には相応しくない、荷が重すぎるとも考えられます。(1)に関しては、若手研究者は、優れた研究であればあるほど、よりインパクトの高い雑誌に投稿することを望むので、福岡医学雑誌を介して若手研究者を育成することは極めて困難と考えられます。また、rapid communication として発表する場合には、weekly か少なくとも monthly に発行される雑誌が優先されるので福岡医学雑誌は対抗できないのではないかと危惧されます。一方、症例報告については期待できると思われます。近年、評価の高い臨床医学雑誌は獲得したインパクト・ファクターを下げるために、症例報告を掲載してくれなくなって来ています。したがって、福岡医学雑誌が症例報告歓迎というポリシーを打ち出せば、ひとつのセールスポイントにはなりうるでしょう。しかし、症例報告は様々多様な臨床分野から発表されるので、どのような症例報告を採択するのか、方針や領域をあらかじめ決めておかないと統一性のない医学雑誌になってしまう恐れがあります。(2)については、既に実現しており、各教室の仕事が持ち回りで総説として紹介されています。九大医学部地区で行われている優れた研究や先端研究に関する情報発信は福岡医学雑誌の重要な使命とも位置づけられ、いわゆる“九大医学の今日そして明日”を俯瞰する好読物となっています。このまま継続していくことが望まれます。(3)についても異論はありませんが、具体化には検討が必要と思われます。医学部キャンパスでは、基礎医学、社会医学、臨床医学、歯学、薬学、医療経営管理学、看護学、保健学など様々な専門領域の生命科学・医学研究者(biomedical scientist)が研究活動を行っており、その活動実績を発表する場として福岡医学雑誌が積極的な役割を担えるのではないかと期待されます。具体的には、キャンパス内で開かれた共同研究の発表会、重要なテーマのシンポジウム、著名な研究者による講演会やセミナーに関するレポートを「学内 News and Topics」といったスペースに掲載することが考えられます。それぞれの現場(会場)に編集委員会の依頼で各専門分野の若手研究者を派遣し、レポートしてもらえば、福岡医学雑誌の内容を充実させ、(2)で述べた九大医学の最前線情報として関心を呼び読者の増加につながるのではないかと期待されま

す。このように、福岡医学雑誌は医学専門の学術広報誌として位置づけることもできます。

福岡医学雑誌のあり方については、これまで教授会でもくり返し議論されて来ましたが、そこで一度検討された提案について述べてみたいと思います。学位審査を申請する場合、主論文の日本語逐語訳を申請書類として提出する必要があります。これまで数多くの学位審査を担当したことがありますが、日本語訳は十分吟味されていないことが多く、日本語の文章としては稚拙といわざるを得ない場合を少なからず経験しました。

本来、学位（Thesis）は博士候補者が専攻したある専門領域を学問的に極めた者に授与されるものとされるので、論文化できた個別研究だけでなく、その特定領域についても十分な知識と深い理解が求められます。審査会では、提出された主論文について集中的に質疑応答が展開されますが、論文に直接関係してはいませんが、その研究分野では重要な概念や最近の動向を尋ねられると満足な回答が得られない場合があります。欧米での Thesis は、本人が行った研究成果を中心に、その専門領域を詳細に解説する分厚い総説論文のスタイルが多いようです。そこで、日本語逐語訳のかわりに、専攻分野の研究テーマに関する総説ないし解説あるいは概観を福岡医学雑誌に投稿してもらい、それを学位審査の際に提出することにしては如何でしょうか。また、修士課程を修了する大学院生が数多く医学部キャンパスで活躍していますが、彼等が研究成果を論文化する場合には、福岡医学雑誌へまず投稿することを奨励し、何らかの特典を与えることなども考慮されてよいのではないかと思います。Review あるいは Overview のボリューム（頁数）、投稿から印刷までの時間、査読の必要性の有無、投稿料など検討すべき点が多々あると思われますが、若手研究者が福岡医学雑誌に関心を示すきっかけにはなりうるのではないかと期待するものです。

福岡医学雑誌が「九大医学」の情報発信源として重要な役割を担い、これからも継続・発展していくことを切に願うとともに、病院地区全部局の教員で構成される編集委員会のさらなる活躍をお祈り致します。